Trading care
共に生きる　共に働く

2025年７月１日
Vol. 62

はてぃはてぃ

HATI-HATI

HATI-HATIはインドネシア語で相手を思いやる時に使うやさしいことばです。

初夏の味覚“枇杷（びわ）”

　地域の方から差し入れでびわをいただきました。
フィリピン出身の女の子が初めてびわを見たそうで、「これは何ですか？」と興味深そうに尋ねてきました。
　日本では、びわは初夏の果物として親しまれており、町で見かけると「ああ、夏が近づいてきたな」と季節の移ろいを感じるものです。
　私たち日本人にとってはなじみ深く、当たり前のようにある果物でも、海外から来た方々にとってはとても珍しく、新鮮に映ることがあるのだと、あらためて気づかされました。
　日本には、そうした魅力的な食べ物がたくさんあるのだと思います。

ユニークな挨拶は顔を覚える

公益社団法人トレイディングケア　監事　塚本 紀之

　57歳からジョギングを始め、10年近く経過した。一向に記録はよくならないが、最近では趣味を聞かれると「マラソン」を入れるようにしている。たいていは「すごいですね」と、言葉のリスペクトを匂わせながらも「私には理解できません」と暗に話を広げさせたくないニュアンスで終わる。
　ジョギングは実はさして苦しくもなく走れる時間がある。それは、自分のスピードと呼吸のリズムと心臓の動きがマッチした時だ。苦しくもないので汗もかかない。このままどこまでも走り続けられる気持ちにもなる。大袈裟にいえば一種の日常からの離脱であり、悦に浸っている。
　この悦に浸った状態を突然壊されながらも妙に嬉しくも納得する出来事を経験した。その日もジョギングをしていた。たまたま中学生の下校のタイミングに出くわした。おそらく、中学校で指導されているのであろう。みんなが私に「こんにちは」と挨拶してくれる。せっかくの悦の状態、挨拶で呼吸のリズムを崩したくない。私は声を出さずに頭を軽く下げながら中学生の間をすり抜ける。66歳の身体は微妙な平衡バランスを保っていたが、突然、汗を吹き始めた。こうなると再度の「悦入り」はなかなか難しい。私は意を決して中学生の挨拶に「こんにちは」を返し始めた。
　目の悪い私は、すれ違う瞬間に声の主の顔を確認する。声とマッチングする顔もあれば、そうでない顔もある。30人くらい挨拶したところで、期せずして顔を覚えてしまう2人に遭遇した。一人は「頑張ってください」と。「年配の私に頑張れと言うな」とも思ったが、私は正直、不意打ちを食らっていた。顔はまだ幼さを残していた。「もう油断はしない」と心に誓った瞬間、もう一人の声にやられた。「自己ベストを目指してください。私も陸上部です」と。こちらは中学生にしては大人びた顔つきの女子だ。もう1年くらい前の出来事だが、二人の顔ははっきり覚えている。

今月の日本語「草の根とソフトパワー」
日本語教師　林　三郎

最近、「ソフトパワー」という言葉を時々耳にします。5月に亡くなられたハーバード大学のジョセフ・ナイ教授が提唱されていたこの考えとは、国と国の間で、軍事力や経済力で支配する（ハードパワー）のではなく、その国の文化や歴史、価値観などの魅力（ソフトパワー）で影響し引き付けようとする考え方です。昨今の緊迫した世界情勢下では、その重要性が見直されています。国家間では、時代時代で様々な問題が持ち上がり、関係が悪化することが多くあります。どうすれば戦争などの最悪の事態に陥る前に解決するのか悩ましい問題です。

少し前になりますが、「草の根外交」ということが話題になりました。外国の民間団体や個人との、民間レベルでのお付き合いや友好関係のことを指しますが、この関係がベースにあると、いざ国家間で問題や紛争が起きた時にも、問題が過激化したり、決定的な分裂に至らずに済むこともあるでしょう。

この「つなぐ」に来られている外国人の方々は皆とてもフレンドリーで賢い方々です。日々、楽しく日本語を勉強し合う中で、個人的な関係も深まりお互いの国と国との「草の根外交」も深まるでしょう。皆がこれを引き継いで行くこの先がとても楽しみです。

ベトナム人の楽しいお話
～日本の生活の中で気づいたこと～
ホン

日本に来たばかりの頃、どうして日本人は外出時にそんなに靴を履くのだろうと不思議に思っていました。実は最初に日本に来たときは可愛いサンダルをたくさん持ってきたのですが、結局ほとんど使わずにしまい込んでしまいました。

調べてみると、日本では室内で靴下を履いて過ごすことが当たり前の習慣だと分かりました。特に、日本の家の床は木材でできていることが多く、裸足で歩くと汗やホコリが染み込みやすく、掃除もしにくく、においの原因にもなります。 一方で、ベトナムでは家の床は主にタイルや石材でできていて、ひんやりしていて、滑らかで掃除もしやすい素材です。そのため、ベトナム人は家の中で裸足で歩いても、床が汚れたり汗を吸収したりすることをあまり心配しません。 建築素材や気候、さらには衛生や生活空間に対する考え方の違いから、日本とベトナムでは靴やサンダルに対する文化が異なる形で発展してきたのです。

～スウェーデンでの新たな生活のはじまりに介護の仕事を選ぶ若者たち～　　アンジー

私は、2019年の夏から秋にかけてスウェーデンの南部に滞在し、難民・移民背景を持って介護の仕事をしている方々のお話を聞かせていただきました。お話をお聞きした人は本当に様々でしたが、イラクやシリアから難民としてきてスウェーデンへ来て5年もたっていないという若者も何人かいました。彼ら彼女らが介護の仕事をはじめた理由は、「お年寄りが好きだから」「スウェーデン語がもっと上手に話せるようになりたいから」「人を助ける仕事をしたかったから」など。国民高等学校（自治体が運営する成人教育機関、ほとんどが寄宿制）でスウェーデン人の若者と触れ合いながら勉強をする傍ら、アルバイトとして介護の仕事をしていました。中には、将来は歯医者や弁護士になりたいと大学入学を目指している人も複数いました。戦争が亡くなれば母国に帰りたいという思いを持ちつつも、これからスウェーデンで暮らしを確立していくために、それぞれの将来設計があるのだと感じました。管理者たちは、彼ら彼女らの働きぶりを評価していました。難民・移民背景を持つ人たちにとって、介護の仕事は「スウェーデン社会への鍵」になっているのだろうということでした。

国民高等学校の写真

編集後記

新センター引っ越し前
職員決起集会を開催しました

多文化共生コミュニティセンター「つなぐ」は、7月に新しい場所へ引っ越すことになりました。

新しいセンターへの引っ越しを前に、職員の決起集会を行いました。会場は、新城市にある湯屋温泉。自然豊かな環境の中で、旅館に一泊し、温泉やホタル観賞などを楽しみながら、職員同士の親睦を深めました。日常から離れた、リラックスできる貴重な時間となりました。みんなで一緒に過ごしたこの経験は、これからの活動の大きな力になると感じています。　　陽子

@TSUNAGU_TAKAHAMA

公益社団法人
トレイディングケア
〒444-1303
愛知県高浜市小池町6-5-6
TEL　0566-57－7700
FAX　0566-55－1305

日・月・祝日はお休みです。